

に真紅の薔薇の花輪をのせて。……アラトヴは心が立ち騒いで床の上に起き直つた。

見ると、自分の前には、幅廣の、紅いリボンをつけた夜帽を被つて、白い Dressing-jacket を着た叔母さんが立つて居た。

——プラトシヤ！あゝ叔母さんだつたんですか。

彼れは一生懸命にかういつた。

——はい、妾だよ。妾ですよ。

叔母は答へた。

——何か用なんですか。

——あなたに起されましたの。始めは何だか呻くやうな聲がすると思つて居

ましたが、……俄かに「助けてくれえ！ 助けてくれえ！」といふあなたの聲がするんですもの。

——私は怒鳴りましたか、叔母さん。

——えゝ、そして「助けてくれえ！」つてこんな聲で。私は、まあ、あなたがどうかしたんぢやあないかと思つてねえ。それで来たんですよ。氣持は何ともありませんか。

——えゝ、何とも。

——ぢやあ、あなたはいやあな夢を見たんでせう。少し薫物を燃やして見ませうかねえ。

アラトヴは叔母の方を凝つと見て、聲高に笑つた。あの長い顔に恐怖を帯び

て夜帽とdressing-jacketの叔母さんの姿は、たしかに滑稽であつた。今まで彼れを取り巻いて彼れを攻めつけるやうな不思議——魔力といふやうなものが皆な残らず瞬間に消えて行つて仕終つたやうに思へた。

——いゝえ、それには及びません。思ひもよらず吃驚させたことは何うか許して下さい。あゝお寝みなさい、私も寝ますから。

叔母はなほ其處に立つて、蠟燭を指しながら、

——何故消さないの。……あぶないよ、ひよつとして火事でも出さうものなら。

といひながら、室を出た時、彼女は影ながら、自分のいとしい甥の爲めに、神に祈禱の十字を切ることをしないで居られなかつた。

d. Comenini

アラトヴは直きに眠つて、朝まで寝通した。翌朝は機嫌よく起きた。……何となく心持のすまないやうな気がしないでもなかつたが。……気分も軽やかに、そして自由であつた。

——考へて見ると、何といふロマンティックの空想だらう。

と笑ひながら、我れと我れに云つて、覗き眼鏡や、日記から破いた頁には眼もくれなかつた。けれども、朝飯を済して仕終ふと、クラブアの所へ出掛けて行つた。

何故其所へ行く氣になつたか……自分にもかとは分りかねた。

アラトヴが訪ねて行くと、快活なクラブファは丁度家に居た。一寸何角と話を
して、アラトヴが叔母や自分のことを全く忘れて居たことを難じた。それから
彼の『黄金の心臓』すなはち姫が、ヤロスラヴから、魚の鱗の縫箔をした帽子
(Smoking cap) をクラブファに送つたといふ事を話して、また新たに姫を褒め
立てた。アラトヴは丁度クラブファと對ひ合つて坐つて、真直に其の顔を見なが
ら、カザンへ行つて来たことを話した。

— 何に、君はカザンへ行つて来たんだつて、何の爲めに？

— そら、あの事で事實を集めたいと思つて……クララ ミリツチのさ。

— 毒を飲んで死んだ女だね。

— あゝ。

クラブファは頭を振つた。

— いや、君も變つてゐるね。平氣でさ。一千哩も遠方へわざわざ出掛けて
行つて歸つて来て……何の爲めにさ。え、若し其の事に女が關係があるとすれ
ば、私には何でも解る、何でも、如何なる狂熱的な意味も！

クラブファは頭の髪を掻き乍ら、

— 單に君等仲間の學者連中が言ふ所謂材料を集めるといふならば……僕は
まア御免を蒙るね。そんなことをするには報告的記事ばかり書いてる記者が
あらうといふものさ。ところで、君はその年老つた婦人と姉娘とにすつかり

友達になつて了つたのかね。姉は面白い女だらう。

——面白い人だ。澤山おもしろいことを知らしてくれたよ。

——何うしてクララが毒を飲んだか、くわしく話したかね。

——何うして、といふと。

——どんな風に、といふことさ。

——姉は非常に力を落してゐたから、私は氣の毒になつてあんまり尋ねるところを控へてゐたが、何かそれに異つたことでもあるのかね。

——實際大ありさ。まあ思つて見玉へ。クララは丁度その日に舞臺へ出なければならなかつたのさ。そして自分の役をつとめたらう。ところがまあ芝居へ毒薬を持つて行つて、序幕の初まる前に飲んだつていふのさ。併し兎に角

自分の役だけは仕終までちやんと勤めたさうだが。毒を飲んで居てだよ！

驚くべき意志の力ぢやあないか。性格とでもいふべきものだらうか。世間の評判ではクララがこの時ほど高ぶつた感情と熱情とを以て演じたことはなかつたといふ。観客は何にも知らなかつた。盛んに喝采をし encore を浴せた。

……やがて、幕が閉ると、クララは其處に、舞臺の上に倒れたんだ。痙攣、痙攣、そして一時間経たない内に、死んじまつたんだ。このことはもう皆んな君に話さなかつたかね。新聞にも出て居たよ。

アラトヴの手は急につめたくなつた。そして身内の戦へを感じた。やがて、

——いゝえ、君は何にも話さなかつた。で、君は何の狂言の時だつたか知らない？

クブファは暫らく考へた。

——あのう、何でもね、——あの、裏切をする娘があつて……何かのドラマだつた。クララは天性ドラマをやるやうに出来てゐたんだね……容貌からしてもうそれだ……併し君は何處へ行くのさ。

アラトヴが帽子へ手をやらうとしてゐるのを見て、クブファはかういつて話を中途で止めた。アラトヴは

——どうも今日は気分が悪いから失敬、又その内に來らア。

クブファは引きとめて顔を凝と見て、

——何てまア神経質だらう。まア鏡を見玉へ……白堊のやうに青白いせ。

——どうも氣持が悪い。

と、アラトヴは引留めるクブファの手を引きはづして、外へ出た。此の間際になつて、アラトヴは自分がクブファを訪ねて來た唯一の目的は、クララのこと、に就て話をするのであつたと、我れながら初めて分つたのであつた。

“Unhappy Clara, poor frantic Clara.”

不幸なるクララよ、あはれに心狂へるクララよ。

けれど家へ歸つてから、直きに或る程度まで安静な心に歸つた。

クララの死につき隨へる種々の事情が、初めの内は彼れに劇しい感動を與へてゐたが、やがて、今クブファのいつたやうに「毒を飲んで居て」藝を演じたといふことが、如何にも壯烈な勇膽なものゝやうに思はれた。併し彼れは既に多少嫌惡に似た感じを起しはしまいかと危ぶんで、此のことはもう考へまいと

努めた。夕餐の時、ブラトシヤと對ひ合つて坐つた時、急に夜半に叔母が来た時のことを思ひ出した。短いdressing-jacket・リボンの高くついた帽子、……何故また夜帽にリボンなどをつけたのだらう？——丁度舞臺の變る景に舞臺監督の口笛で、全く舞臺が變つて仕終ふやうに、彼れの空想を盡く散せしめたあのおかしな様子！それで今、彼れはブラトシヤに、彼れが夢中で叫んだ聲を聞いたこと、その聲に驚かされたこと、飛び起きたこと、一寸の間は戸が分らなかつたことや、何かを事細かに再び話してくれと求めた。夕方になつて彼れは叔母とカードを取つて遊んで、自分の室へ歸つた時には稍憂に沈んでゐたけれど、やがて再び全く落ち付いた氣持になつた。

アラトヴは次第に日の暮れかゝるのを何とも思はず、また夜になるのを恐

れても居なかつた。彼れはゆつくり靜かに寝られるだらうと信じて居た。クララのことは絶えず心の内に浮んでは来たが、自殺の仕方が殊更らしくて、彼れはそれを思ひ浮べるのさへ厭であつた。厭味なこの一事が、クララに對する凡ての追懷を妨げて了ふのであつた。彼れは一寸覗き眼鏡を覗き込んで、クララは恥ぢて居るので、眼をそらして居るのだな、と思つた。此の覗き眼鏡と反對の側の壁に、彼れの母の肖像が懸つて居た。アラトヴはそれを釘から外して、久しい間それを凝視め、やがてキスをした後に、丁寧に抽斗の中へ收めた。何故彼れはさうしたのであらうか。クララとそんなに近く此肖像を懸けておくのは不適當であつた爲めか……或は外の他の理由からか。彼れは自から問ふことをしなかつた。が母の肖像畫から、父のことが色々と思ひ出された。その父といふ

のは、此の室で、此の寢臺で死んだのであつた。

アラトヴは心で父にかういつた。

——お父さんは之をどうお考になりますか。お父さんは此の事を知つて被居る。お父さんもシルレルの所謂靈魂の世界のあることを御信じてせう。どうしたらいゝのか教へて下さい。

だが彼は聲高に、

——お父さんは僕にこんな愚劣な事を思ひ止つて了へと仰つただらう。

と云つて、一冊の本を取り上げた。けれども、彼は暫らくの間讀む氣にもなれず、唯だ身體全體に倦怠を覺えて、直ぐに眠れるだらうと思つて、常よりも早く床に入つた。

さういふ風であつたが……靜かに眠れるだらうといふ彼れの希望は實現されなかつた。

十七

まだ夜半の時を時計が打たない内に、アラトヴは一通りならぬ怖しい夢を見た。

夢の中に、彼は立派な所領地の屋敷に居る。その家と、地面とは近頃買つたものであつた。彼は、

——いゝ。非常にいゝ、今は。けれどやがて悪いことが来る。

と思ひつゝ居る。自分の側には、小さな小男の執事があちこちして居て笑つたり、御辭儀をしたりして、屋敷中の何も彼も皆な見事に整頓して居る様子アヲトヴに見せやうとして居る。

——さあ此方へ、どうぞ、此方へ。

一言毎に世辭笑をしながら、言ひつゝ居る。

——どうぞまあ御覽遊ばせ。實に何も彼も御盛大でござりまする！ 御馬を御覽遊ばせ。……あの立派な御馬！

アヲトヴを見ると、一並びに無数の馬が、此方へ後を向けて、厩の中に立つて居る。其の尾といひ、鬣といひ、誠に立派である。……併しアヲトヴが其の

厩に近づくや否や、馬の頭は一勢に此方へ向いて、荒々しく齒を露出した。

——非常にいゝ。けれどやがて悪いことが来る！

とアヲトヴは思つた。

——さあ、どうぞ此方へ、此方へ。

と執事は再び繰返した。

——御庭へ御出で遊ばせ。御庭の林檎がまあほんとうに綺麗ではございませんか。

まことに林檎はきれいで、紅くて、圓く熟して居た。併しアヲトヴが見ると直ぐに萎びて落ちて仕終つた。

——悪いことが来る！

とアラトヴは心で思つた。

執事は、

——これが湖でござりまする。まあ青く鏡のやうに滑らかではござりませんか。此處には黄金のボートがございます。お乗り遊ばしませんか。……自然と浮動いてまゐります。

といふ。

——いや乗るまい。悪いことが来やうとして居る！

とアラトヴは思つた。それにもかゝはらず、そのボートへ乗つて仕終つた。

其の底の方に、猿のやうな動物が一疋蹲つて居て、手に黒い液で充満になつて居るコップを持つて居た。

すると執事は岸の方で、

——決して御心配には及びません。それは何でもござりません。これは死でござりまする。御機嫌よろしく！

と叫んだかと思ふと、ボートは矢のやうに進み出たが……俄かに嵐が横なぐりに、前夜の静かな音のない大風とは異つて——いや全く異つた、黒い恐ろしい、吼へ狂ふ暴風雨！ 周囲は盡く混乱を極めた。

冥濛たる黒暗々のうちに、アラトヴは舞臺の衣裳を着たクララの姿を見た。彼女は遙か遠くの喝采の聲に聞き惚れながら、コップを口元へ上げてゐた。すると、皺枯れた聲が、彼れの耳元で、

——君はこれが笑劇に終ると思つて居たのかい。悲劇だよ！ 悲劇だとも！

全身慄へ戦ぎながら、アラトヴは眼がさめた。室の内は暗くはなかつた……幽かな光が何處からともなく流れ込んで来て、室の中の凡てのものを陰鬱な静寂の内に、うすぼんやりとあらはして居た。アラトヴは此の光の何處から來たかと思ふよりも、まづ唯だ一事、クララが其處に、その室に居るといふこと……クララが自分の近くに居ることを感じた。彼れは再び、そして永久に彼女の方の中に居るのであつた。

思はずかうした叫びが彼れの唇から出た。

——クララ、貴女はそこに居るの？

すると

——イエース！

と、ほの暗い、ひっそりした室の真中で、はつきりと響いた。

アラトヴは聞えないやうに、前のやうに、繰返していふと、再び、

——イエース！

と聞える。

——ちやあ、顔が見たい！

と彼れは叫んで、寢床から蹴ね起きた。

暫時の間は氷つたやうな床の上を、靴下も穿かないで、踏みしめたまゝ、同じ所に立つて居た。眼をさよろ／＼させて、

——何處に、何處に？

と低聲でいひながら。

何にも見えず、何にも聞えなかつた。……彼れはあたりを見まはした。そして室を充たして居た幽かな光は、恐らく、彼れが眠つて居る間に、叔母が隅の方に置いてくれた、紙で圍つた有明ランプからであることに氣がついた。またまた薫物の香がする……これも恐らく叔母のすさびであらう。

彼れは急いで着物を着換へた。床に入つて、寝やうなどとは思ひもよらぬことであつた。室の中央に突立つて、腕を組んだ。彼れにはクララが其の室に居ることが、前よりも強く感ぜられるのであつた。

高い聲ではないが、宛ら呪文を唱へるやうに、今や彼れは口の中で嚴かに話し初めた。

——クララよ、

若しほんとに此處にあなたが居るならば、そして私の居るのが分り、私の聲が聞えるならば……姿を見せませ！ 若しわが身の上にひく力があなたの力であるならば、姿を見せませ。若しあなたの心が分らずに、つれなかりしを、今どれほど自から悔いて居るかが、あなたに分るならば、——姿を見せませ！ 若しわが耳にする聲のまことに君の聲ならんには、若しわれを今支配する力がまさしく戀ならんには、若し君今わがいかばかり君を戀へるかを知らんには、——今まで誰れ一人女を戀したることも、知りたることもあらざりし我れの——若し、あなたが死んでから、私がいかに遺瀨なくあなたを慕ふやうになつたかい分るなら、若し私が狂うては困るとならば——姿を見せませ。

アラトヴは此の最後の言葉を言ひ終るか終らぬに、誰れか後から——彼の日にあの並木道で會つた時のやうに——足早に来て、肩に柔い手を掛けたやうな気がした。後ろ——を振り向いて見たけれども誰れも居なかつた。けれどもクララが現に此處に居ると思ふ感じが今は益々明瞭になつた。もう一度忙しうに自分の周圍を振り返つて見たほど、其の感じがたしかなものになつた。

何であつたか？ 彼れから二足ほど離れて、一人の婦人がイーヂ チェアの上に、黒色の衣服を着て坐つて居た。覗き眼鏡にある姿と同じやうに頭が向を向いて居た。……それは彼女であつた！ それはクララであつた！ 併しまあ何と氣むづかしい、悲しうな顔だこと！

アラトヴはしづかに跪づいた。ほんとうにアラトヴがクララを見たのは、た

しかであつた。彼れはもう恐れも嬉しさも感せず、驚きといふ感じさへもなかつた。……彼れの心臓の鼓動は一層静かになつた。彼れの心の中には唯だ一つの感じ、『あゝ、とう／＼！』といふことばかりがあつた。

弱いながらも、しつかりとした聲で、

——クララ！ 何故お前は僕を見ないんだ？ 僕はお前であることを知つてゐる。……併し或は（覗き眼鏡の方を指しながら）あのやうな姿を想像が生んだかも知れない。だから、お前であることを僕に證據立て、くれ玉へ……僕の方を向いて、僕を見玉へ。クララ！

クララの手は、次第に上りかけたが、またぐたりと垂れた。

——クララ！ クララ！ 僕の方を向いてくれ玉へ。

此の時、彼女の頭は次第に此方（こちら）を向き、閉（と）ぢて居（ま）た唇（くちびる）は開（ひら）き、黒（くろ）い眼（め）眸（まゆ）はアラトヴを凝（みつ）視（め）るのであつた。

彼は少し後（うしろ）ろへ下（くだ）つて、長（なが）く引（ひ）いた顔（かほ）へ聲（こゑ）で、あゝ！ といつた。

クララはちつと彼（かれ）をみつめた。……が其（その）眼（め）付（め）きや、其（その）顔（かほ）付（め）きは前（まへ）のやうな悲（かな）しうな、苦（にが）みきつた不（す）快（わい）な表（へう）情（じやう）を止（と）めて居（ま）た。思（おも）へばあの文（ぶん）藝（ぎ）會（かい）のあつた日（ひ）に舞（ぶ）臺（たい）へ出（で）て、ま（ま）だアラトヴの姿（すがた）の見（み）えな（な）い間（ま）の表（へう）情（じやう）が、全（ま）くそれであつた。丁（ちやう）度（ど）その時（とき）と同（おな）じやうに、彼（かの）女（ぢよ）は急（きん）にさつと顔（かほ）を赧（か）らめて、顔（かほ）は美（うつく）しく輝（か）いて、眼（め）は燃（も）えて、嬉（うれ）しさうな勝（か）ち誇（ほ）つたやうな微（び）笑（せう）が、彼（かの）女（ぢよ）の唇（くちびる）を洩（も）れるのであつた。

——僕は來（き）た。僕は貴（あなた）女（ぢよ）に征（せい）服（ふく）された。……僕（ぼく）を取（と）れ！ 僕（ぼく）は貴（あなた）女（ぢよ）のものさ。

して貴（あなた）女（ぢよ）は僕（ぼく）のものだよ！

さう言（い）つて彼（かれ）は、女（をんな）にふるひついた。彼（かれ）は微（び）笑（せう）を帶（お）びて居（ま）る勝（か）ち誇（ほ）つたやうな唇（くちびる）にキス（く）しやうとした。彼（かれ）は燃（も）えるやうな接（せつ）觸（しよく）を感（かん）じた。彼（かれ）は女（をんな）の齒（は）の冷（つ）たさをも感（かん）じた。勝（しょう）利（り）の叫（さけ）びが、ほの暗（くら）い室（む）を通（とほ）して鳴（な）り響（ひび）いた。

叔（おじ）母（はは）のプラトニダ イアノヴナは驅（か）け込（こ）んで來（き）て見（み）るとアラトヴは氣（き）絶（ぜつ）して居（ま）る。彼（かれ）は跪（ひざま）づいてゐた。頭（かしら）をアーム チェアに凭（もた）せて、兩（りやう）腕（うで）を力（ちから）なくぐたりと垂（た）れてゐた。其（その）青（あお）ざめた顔（かほ）は限（かぎ）り知（し）れぬ歡（くわん）喜（き）に酔（よ）うて輝（か）いて居（ま）た。

叔（おじ）母（はは）は彼（かの）れ（れ）の傍（そば）に膝（ひざ）を付（つ）いて、彼（かれ）をかき抱（だ）いて、おろろく聲（こゑ）で、

——ヤシヤ！ ヤシヤ！ まアどうかしたの？

といひながら、彼（かの）女（ぢよ）の瘦（や）せた腕（うで）で抱（だ）き上（あ）げやうとしたけれども、アラトヴは

更にも動かなかつたのである。

叔母は我れにもあらぬ聲で叫び聲をあげると下婢は驚いて駆け込んで来た。二人して兎に角ゆり起して、聖畫の前の聖灯から取り來つた水をかけた。

彼れは我れに歸つた。けれども叔母の問ひに答へもしないで、唯だぼうつとして、悅樂のうちにある面持で、微笑むばかりであつた。叔母は甚だ心安からず、幾度となく十字を切つて、神に祈禱した。……アラトヴは終に、叔母の手を拂ひのけて、前と同じやうな *Ecce homo* な顔の表情を以て、

——あれ、叔母さん如何うしたんです？

——ヤシヤ！ お前どうしたの？

——私！ 私は嬉しいんですよ。さうなんですよ。今私は横になつて眠りた

いんですよ。

彼れは起き上らうとしたけれども、兩脚が立たず、身體が言ふ事をきかず、力が抜けて了つたやうに感じて、叔母と下婢とに助けられなければ着物を着かへて寢床に入ることも出来なかつた。けれど床に就くや否や、直ぐもうぐうぐうと寝て了つた。顔には同じ喜びと勝利との表情を止めて居た。たゞ顔の色ばかりは青ざめて居た。

翌朝、叔母が来た時に、アラトヴはまだ床の中に居たが、まだ身體がしつかりしなかつた。それで床を離れる氣にもなれなかつた。叔母は彼れの顔色の蒼白いのが厭でならず、心の中で『神よ我等の上に慈悲あらせたまへ！ほんにどうしたことだらう。』と思つた。『血の氣もなく、肉汁は嫌ひ、寢て笑つて居て、何處も何ともないと言ひつけて居る！』

その翌る朝になつて朝飯を食べないのを案じて、叔母は、

——まあどうおしなの？ 一日寢て居るつもりなの？
とさくと。

——一日寢て居たら、どうなのさ。

と溫和しく答へた。この馬鹿に溫和しいのが叔母には氣になるのであつた。

アラトヴは大なる非常に愉快な祕密を發見した人のやうに、そしてそれを人には知らすまいとでもして居るやうに見えた。彼れは夜になるのを待ちかねるといふでもないが、好奇心を以て、夜になるのを待つて居た。

——次には？ 一體何んな事が起るだらう。

自から問うても見た。

不思議であるとも、我が迷ひであるとも、もう感じないやうになつて居た。

彼れはクララと現に交通して居ること、二人は互ひに相愛して居ること、それについては彼れは疑を有つて居ないことを信じて居た。たゞ斯んな戀が何うな

り行くであらうか。彼れはあのキスを思ひ出した。……すると速かに甘い樂しい過去の追憶から起る顫動が身體中を廻るのであつた。

——Romeo も Juliet も知らなかつたほどのあの接吻！ だが此の次には僕はもつと強くなつて居て見せる。そして彼女を支配してやるであらう……クララは黒い捲髪に小さな薔薇の花環をつけて來るであらう。

と考へた。

——併し次に起る問題は？ 僕と彼の女とは到底一所に暮すことは出來ないとおもふ。それとも出來るであらうか。さうとすれば、僕は、彼の女と一所に暮す爲めに死なねばならぬだらうか。彼女が姿を現はして來たのはその爲めではないだらうか。自分を囚へんが爲めではあるまいか。

——してまた、其の時に何んなことが起るとおもふ？ 若し僕が死なねばならぬならば、僕をして死なしめよ。今になつては死ぬといふことさへも僕にと取つては何等の恐怖を持來らさない。死んだつて僕を虚無にしてしまふ事は不可能ではないか。却つて死んだ後には僕は幸福であることが出來るであらう……クララと同じく、生きて居る間は、少しも幸福ではなかつたと同じやうに、死んだからは幸福であると信ずる。——僕もクララも 'pure' である！

あゝあの Kiss—

*

*

*

*

*

*

叔母はしきりなしにアラトヴの室へやつて來た。けれど何のかのと尋ねて煩がらせはせず、たゞ容態を見ては何か泣き、歎息をついて出て行つた。然るに

晝になつても、晝飯を食べやうともしないので、もう其の儘にはして置かれな
いと叔母は懇意な田舎醫者と呼びに、出て行つた。彼女は唯酒を飲まないのと
獨逸人の妻を持つて居るといふ點だけで此の醫者を多少信用して居る。アラト
ヴは叔母が自分を診察せに醫者をつれて來たのを見て驚いたが、何うか厭でも
あらうが、私の爲めに診て貰つてくれとの叔母の切なる頼みを辭みかねたので
あつた。其醫者の名はバラモン。バラモニツチといつた。醫者は脈をとり、舌
を視、容態を聞いてから、是非胸を叩いて見なければならぬと言ひ出した。
アラトヴはやさしい氣持になつて居たので、醫者の言ふ通りになつた。醫者は
そつと胸を開けて軽く叩いて其の音を聞いて、何か呟いて、途切れながら何か
云つて、處方箋を書いた。そして靜かにして心を落付けて居るのが肝心だと忠

告した。

——たしかに、それはもうおくればせだ。

とアラトヴは、獨り心の中で思つて居た。叔母は醫者を送り出して、戸口のと
ころで、そつと三留の紙幣を一枚渡しながら、

——ヤシヤは何處が悪いんでせうか。

と尋ねると、醫者は、凡ての近頃の醫者——殊に官服を着けた醫者のやうに、
術語を使用ふのが好きと見えて、神經的胃腸衝の有らゆる徴候が具つて居
り熱病に必ず伴ふ徴候も見えろといやに術語を交せて答へた。

——もつと分り易くいつては下さいませんでせうか。ねえ先生。ラテイン語
なんぞお使ひにならないで。此處は外科の手術室ぢやあないんですから。

と叔母がいふと、

——心臓がお悪いやうです。さう——熱も少しあるやうです。

と醫者は説明しながら、再び、叔母に向つて、病人は極く静かにして、心を擾がさないやうにしなければならぬと注意した。

——併し危険なことはないでせうか。

と彼女がきくと、

——唯今の所では別にさうした心配はありません。

といつて、醫者は歸つて行つた。叔母は困つたことになつたとおもひながら、薬を取りに醫者のところへ使をやつた。けれど何といつてもアラトヴは薬を飲まうとしない。振出し薬を飲むことさへ厭がつた。

——叔母さん、何だつてそんなに心配なさるんです。僕は今は世の中で最も健全な最も幸福な人なんぢやありませんか！

叔母はたゞわづかに頭を振つたゞけであつた。

夕方になると、熱が出て來たけれども、それでも叔母には自分の室へ歸つて寝るやうにと病人がやかましくいふので、叔母はそれに従つて我室へ歸つたが着物も解かず、横にもならず、アーム チェアに坐つたまゝ絶えず口の内で祈禱をしながら、耳を欹て、居た。そのうちに、いつかうとくとし初めると急にけたゞましい叫び聲に呼びさまされて跳び起きたのであつた。そしてアラトヴの室へ駆け込めと彼は丁度前の晩のやうに、床の上に倒れて居た。

皆なして介抱したけれども、前夜のやうに本氣にはならなかつた。其の晩に

心臓麻痺を起した。非常に高い熱であつた。

それから二三日の後に彼れは遂々此の世を去つた。

二度目に氣絶した時に不思議なことが起つた。家のものが彼れを抱き起して床の上に寝かした時にしつかりと握りつめた右の手の中に婦人の黒髪の小さな捲髪があつた。此の「一かたまりの女の髪」は何處から來たものであらうか。

アンナ セミノヴナは妹のクララの捲髪を遺物として持つて居たけれど、彼女に取つてそれほど貴い遺物をば、どうしてアラトヴにやることになつたであらうか。初め彼の日記の中の何處かに入れておいたのを、貸した時に氣がつかなかつたのであらうか。

アラトヴは終焉の讒語の中に、自分は……毒を仰ひだ後のロミオだといひ、

アラトヴ

首尾よく結婚をしたといひ、歡喜といふものを今眞に知つたといつた。叔母のプラトシヤに取つて最も怖ろしかつたのは、アラトヴが少しの間氣が確かになつて、寢臺の傍の彼女を見ながら、

——叔母さん、何だつて泣くんです？ ——私が死な、けりやあならないからつて？

だつて叔母さん戀といふものは死よりも力のあるものなんですよ

……あゝ死！ 死！ 死が何で恐からう？ 何處にお前の刺はある？ 叔母

さん泣いてはいけません。私のやうに歡んで居て下さい。

といつた瞬間であつた。再び、死人の顔の上には歡喜の微笑が輝いて、それが叔母に取つては、いみじき殘忍な痛苦を與へたのであつた。

Very good one

214

女優終

[Faint handwritten notes and a large scribble consisting of several diagonal lines.]

大正二年六月二十日印刷
大正二年六月廿九日發兌

女優

正價金七拾錢



著作者 花園兼定

發行者 伊東芳次郎
東京市神田區鍛冶町八番地

印刷者 高橋賢治
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 東京市神田區鍛冶町八番地
電話本局八八四番 總替東京一七一番
東亞堂書房

佛蘭 オノレ・ドウ・バルザック氏著 文學士 吉田荻洲君譯

近刊 愛と慾

全一冊 印刷中

貪慾冷酷の父に事ふるに献身的孝養を以てせる天使の如きユウセニイ。冷たき死の床に横たはりつゝも、尙ほ牧師の胸に輝ける、十字架の黄金なるを取らむと焦せる父のグラランテ。嗚呼此父！此娘！何ぞ骨肉の間にして、性情相隔つること斯くの如く甚しきや。然れども思へ、愛と慾とは、人生生活現象の二大動力たるを。自然派の先蹤、オノレ・ドウ・バルザック氏が入神の妙を發揮せる世界的一大名著は是れ！

加藤咄堂先生著 (東亞堂五週年記念出版)

補修養論

大判美本六百餘頁 正價貳十二圓 送費貳圓

(東京日日新聞批評)堂々六百頁の大冊の中に先づ修養の理論的方面を説き、次に修養の方法を擧げて國民道徳の意義及び處世の方法を教へ、更に修養の模範と號して聖賢英雄、文豪、哲人の修養を例示してある。所謂健全にして該博、殊に宗教家の一弊たる我田引水の處なく、何人にも有益必須の書物である。尙ほ卷末に格言詩歌の短章を掲載し更に索引を附して反覆精讀に便してある。

文學博士幸田露伴先生著

努力論

美本箱入三五〇頁 正價壹圓六十錢 送費十二錢

一代の碩學幸田文學博士が人力と運命との關係より如何にして自己を革新向上せしむべきかを述べて幸福を招致すべき三大哲理、修學の四標的、最上の努力をなすべき者の心身の準備、四季と人身との相關の秘機、人生の最大不幸たる疾病の排除策等を縱横説して更に人間活動の根本たる精氣死活の玄機に及び成敗利鈍禍福榮辱進歩退歩等因て來る哲理を喝破したる字々金玉の一大卓説也。

加藤咄堂先生、大住舜先生共著

常識之基礎

大判美本六百餘頁 正價貳圓 送費十二錢

(萬朝報批評)現代の人として必ず有するを要する常識を總て供給したる也。全書を宇宙篇、地球篇、生物篇、人類篇、社會篇の五篇に分ち、誰れの讀物としても適し、重寶此上無し(國民新聞批評)處世上緊要なる常識を養成する上に於て頗る補益あるを疑はず(東京朝日新聞批評)讀者の心理を巧に應用して倦怠なく讀了せしめんとしたる用意が面白し殊に引用して百般の疑問を此書中より繰出すに供したるは殊に便利也。

加藤咄堂先生著

人格之養成

大判洋裝一八〇頁 正價五圓 送費六圓

(中央新聞批評)人とは何ぞに筆を起し古代民俗の人類觀人性善惡説、人の價値、近世科學人類觀、人格の意義、人格の根柢等を詳論して最後に養成法に移り修養の時代、常識の涵養、趣味の啓發、意志の鍛錬、處世と人格となすべしと著者獨特の筆法讀者を警醒する所多し、附録なる「讀書と自然」亦是有要の文字。

哲學博士ジョン・トッド教授原著 姫河原無鳴先生譯補

立修自修論

大判洋裝二百卅頁 正價六圓 送費八圓

(やまと新聞批評)本書は米國近代の大學者たり大教育家たり大道徳家たる博士ジョン・トッドの著述を極めて親切に譯補せるものにして、修學の目的以下習慣の偉力、勉強法、讀書法、時間の活用、社交談話法、運動の必要、飲食の節度、經濟の用意等説き去り説き來りて慈母の愛兒に訓ふるが如し。

加藤咄堂先生著

自警錄

中判洋裝二百卅頁 正價五圓 送費八圓

(やまと新聞批評)篇を分ちて自警、感想、觀察、釋義、雜纂の五とす、著者謙虛して、記する所多くは自警に過ぎずと爲せるも自ら警むるは則ち他を訓ゆるの道に外ならず、殊に文辭雄麗、理趣と情景とを併せ得たるを見る、以て練陰篇下の好傑伴たらん。

加藤咄堂先生著 禪學觀

大判洋裝二五〇頁 正價八十五錢

本書は加藤咄堂大居士が、哲學、宗教、心理、倫理、文藝、衛生、武術、處世等の各方面より、前後縱横に禪の真相を觀察し、禪機の妙用、練體養心の工夫、坐禪の形式及方法、禪と道徳、禪と文學藝術、禪と剣道、坐禪と衛生、禪と人格修養等に亘り、大膽にして警拔なる科學的解剖を試み、古來幽玄難解の禪ある禪學の眞髓を剔抉して、見性悟道の一大事を解決すること、吹毛劍を揮つて枯葉を斷つが如き感あらしむ、與奪縱横、活殺自在の大勇猛心を鍛錬せんと欲するの士は乞ふ活眼を開て此活書を讀め。

文 字 禪

中判美裝二百卅頁 正價五十五錢

九州日々新聞批評)本書は禪に關する小品を蒐集したるものにして講話あり、漫録あり、抜抄あり、感想ありて初學者に禪味を解せしめんとする者たり著者加藤咄堂氏は演說に文章に名を當世に馳せたる人にして文に精采あり奇氣あり又た縱横透徹して讀すべき處此書の妙味なるべし。

冥 想 論 附坐禪論

大判洋裝二百頁 正價八十五錢

萬朝報批評)本書内篇十三章、哲學、宗教、倫理、生理、詩美等諸種の方面に亘りて、品性修養の根柢たる冥想の必要を敘し、其理論と方法とを詳説し、和漢古今先覺の思想を提供し來りて引證該博、また餘韻あるなし、外篇二章禪學小景、冥想感外に坐禪論等共に修養を心掛くる者には缺くべからざるの指針なり(大阪毎日新聞批評)冥想論の一篇字々として金にさらさるはなく句々として玉にさらさるはなく、眞に近來快心の著なりと云ふべし。

澤庵禪師細鈔・森大任居士嚴訂 澤庵老子講話

大判美本三二〇頁 正價八十五錢

本書は老子の教訓を禪門近世の大徳澤庵禪師が卓抜の見以て平易簡明に講解せられたる珍書にして、禪の妙と老子の玄と相進發して龍の雲を得たるが如く、當に乾坤を吞吐するの感あり、人事紛々俗務蠅集の中に没頭するの士一今附するに禪師が、神韻縹緲として心胸自ら快潤するを得示したる秘書『太阿劍』を以てす俱に精神鍛錬の絶好針劍。

獲生論 語 辨

新形四百七十頁 正價六十五錢

古來論語の講解を試むるもの汗牛充棟も畜ならずと雖ども而かも尙學者をして亡羊の嘆を發せしむるは、豈に昭代の痛恨事にあらずや、本書は徂徠先生の遺著にして當に如上の二項を補ひ得て餘りあるの一大珍書、中訓讀と講義とを導くが如きの中に、而かも森嚴犯すべからざる聖人の偉大なる人格を彷彿せしむるの概あり、眞に初學道に入るの好指南車也。

濫江保先生纂譯

ソクラテス論語

袖珍美裝三九〇頁 正價七十五錢

(東京朝日新聞批評)人間社會の實踐躬行に適切なるソクラテスの語を孝悌、修身、齊家、公務等の二十八章に分類排次せる書にて希臘古代の聖人が人に教ふる所の如何なるものなるかを知り且つ味ひ且つ行はば斯る排次法を便利なりとすべし聖人は東洋のみの産物に非ず、苟くも人間の生る所には人間の道存して之を教ふるの聖人ある也文の簡古にして含蓄深きも殆んど孔子の論語に同じ。

大内青樹居士序・釋悟庵師著 禪と修養

大判洋裝一九〇頁 正價八十五錢

(萬朝報批評)禪を唯靜止唯消極なりと爲す世の誤解を破し其靜動兩面を詳説し物質精神兩方面より束縛を脱する法を教へ字句の本體は即ち我にある事を示し延いて人生の目的も亦成る世の誤解等に論及す禪の何物たるかを知らざる者も熟讀玩味するうちに自ら無自性の妄を認むるを得む(讀實新批評)枯木野狐禪の難病を救済する爲に本書を公にしたりと云ふ著者の識見は極めて明快に書き下された無邊快禪題詞・破魔禪居士著

禪と活動

大判洋裝一六〇頁 正價六十五錢

(萬朝報批評)大に靜中の動換言すれば禪の積極的活動の方面を總括せんと努めたるもの如し、如しければ先づ卷頭易に「大勇猛心」聖諦第一義「靜中動」一課體になれ「一言ふば易く行ふに難し」常軌を逸する勿れ「等」の數字に亘りて詳細に活動的禪の如何なる者なるかを述べ以下九章に亘りて詳細に活動的禪の如何なる活動し如何なる人によりて活動せしめ來歴を歴せり文章又一般宗教書類と全く其類を異にし明快縱横詞藻豊富にして再讀するに足る。

俳 味 禪 味

中判美裝二三〇頁 正價四十五錢

俳味とは如何に禪味とは如何に著者禪味を解するの士にして亦初めて俳味を談すべし、本書は俳禪色蕉によりて建設せられたる福音を宣傳したる俳味禪味の骨髓を明にして、閑寂趣味結核の人心に一大覺醒を與へて以て虚飾を去り簡易に就たる現時生活をして趣味を生ぜしむる時思想界の革新命兒也

潮 ま ち 草

大判美本二九〇頁 正價八十五錢

(太陽批評)一讀するに此書程善く著者の性格を表したるは稀なるべし吾人は本書が單に文學的產物として價值多きを語ると共に青年に發する教訓書として乾燥無味の修身書よりも遙に教多きを揚言して彈らざるなり(中央公論批評)殊に士偶木偶は著者の詩情の決して老いざるを見るべく其五回のさざれ文の如きは絶世の妙文金色夜叉の宮の書簡の如きは到底比べものにならぬ心地す。

加藤咄堂先生著 修養はなし草

中判美裝二百廿頁 正價四十五錢

「雨窓閑語」の奇警なる「文談武談」の壯烈なる「夜雨簾々録」は一讀悚然たる幽靈奇聞を語りて、附するに著者が得意の幽靈論を以てし「茶榻閑話」は清瀉飄逸なる超俗的逸話を述べて字々清風を生ずるの思ひあり、若し其れ「修身教材」に到つては、則ち修養自警の絶好資料!俱に文章演說坐談等の新題材として興趣津々眞に晴行雨居の好伴侶。

加藤咄堂先生著

朝思暮想錄

中判美本三百頁 正價八十五錢

(朝思の一節)憐なる哉、今の青年、生活の爲めに業を求むることを知つて、道の爲めに求むるべきを知らず。酒々利に走りて、唯目前の事を企畫して其の根本を逸すること。……(暮想の一節)人生に於ける事業もより少からず。されど唯だ、沈思冥想、我が本來の心性を徹見し、其品性を培ひ、其人格を養ふ亦實に大なる事業たるなり……

加藤咄堂先生著

禪學觀

本書は加藤咄堂大居士が、哲學、宗教、心理、倫理、文學、藝術、衛生、武道、處世等の各方面より、前後縱横に禪の真相を觀察し、禪機の妙用、練磨養心の工夫、坐禪の形式及方法、禪と道徳、禪と文學藝術、禪と剣道、坐禪と衛生、禪と人格修養等に亘り、大膽にして警拔なる科學的解剖を試み、古來幽玄難解の禪ある禪學の眞髓を別抉して、見性悟道の大事を解決すること、吹毛劍を揮つて枯葉を斷つが如き感あらしむ、與奪縱横、活殺自在の大勇猛心を鍛錬せんと欲するの士は乞ふ活眼を開て此活書を讀め。

大判洋裝二五〇頁 正價八十五錢 送費六錢

加藤咄堂先生著

文字禪

九州日々新聞批評)本書は禪に關する小品を蒐集したるものにして、講話あり、漫筆あり、抜抄あり、感想あり、初學者に禪味を解せしめんとする者たり、著者加藤咄堂氏は演說に文章に名を當世に馳せたる人にして、文に精采あり、奇氣あり、又た縱横透徹して、讀すべき處此書の妙味なるべし。

中判美裝二百卅頁 正價六十五錢 送費六錢

冥想論 附坐禪論

萬朝報批評)本書内篇十三、哲學、宗教、倫理、生理、詩美等諸種の方面に亘りて、品性修養の根柢たる冥想の必要を敘し、其理論と方法とを詳説し、和漢古今先覺の思想を提供し來りて引證該博、また餘蘊あるなし、外篇二章、禪學小景、冥想の感外に坐禪論等共に修養を心掛くる者には、缺くべからざるの指針なり(大阪毎日新聞批評)冥想論の一篇字々として金にらざるは、なく句々として玉ならざるは、なく、眞に近來快心の著なりと云ふべし。

大判洋裝二百頁 正價八十五錢 送費八錢

澤庵禪師細鈔・森大狂居士嚴訂

澤庵老子講話

本書は老子の教訓を禪門近世の大徳澤庵禪師が卓抜の見を以て平易簡明に講解せられたる珍書にして、禪の妙と老子の玄と相進發して龍の雲を得たるが如く、當に乾坤を吞吐するの感あり、人事紛々俗務集の中に、没頭するの士一び本書を讀めば、神韻總集として心胸自ら快潤なるを得、今附する澤庵が柳生但馬守と與へて禪二道の極意を得、示したる秘書「太阿記」を以て、俱に精神鍛錬の絶好鎖鑰。

大判美本三二〇頁 正價八十五錢 送費八錢

徂徠論語辨

古來論語の講解を試むるもの汗牛充棟も、當らずと雖も、而かも尙學者をして亡羊の嘆を發せしむるは、豈に昭代の痛恨事にあらずや、本書は徂徠先生の遺著にして、當に如上の缺陷を補ひ得、餘りあるの一大珍書、温言宛と父母の赤子の二項を設けて釋義正編、語句平明、温言宛と父母の赤子大なる人格を彷彿せしむるの概あり、眞に初學道に入るの好指南也。

新形四百七十頁 正價六十五錢 送費六錢

澁江保先生纂譯

ソクラテス論語

(東京朝日新聞批評)人間社會の實踐躬行に適切なるソクラテスの語を、孝悌、修身、齊家、公務等の二十八章に分類排次せる書にて、希臘古代の聖人が人に教ふる所の如何なるものなるかを、知り且つ味ひ且つ行はむに、斯る排次法を便利なりとすべし、聖人は東洋のみならず、西の聖人も、人間の生、存する所には、含養深きも殆んど孔子の論語に同じ。

袖珍美裝三九〇頁 正價七十五錢 送費六錢

大内青樹居士序・釋悟庵師著

禪と修養

(萬朝報批評)禪を唯靜止唯消極なりと爲す世の誤解を破し、其靜動兩面を詳説し、物質精神兩方面より、東洋の禪法を、教へ字の本体に即ち我にある事を示し、延いて人生の目的、體力の養成、處世の秘訣等に論及す、禪の何物たるかを知らざる者も、熟讀玩味するうちに、自ら無自性の妄を認むるを得、(讀實新批評)枯木野狐禪の難病を救済する爲に、本書を公にしたりと言ふ著者の識見は極めて明快に書き下された、無邊快禪題詞・破魔禪居士著

大判洋裝一九〇頁 正價八十五錢 送費六錢

禪と活動

(萬朝報批評)大に靜中の動換育すれば、禪の積極的活動的方面を感得せんと努めたるもの、如しされば、先づ卷頭易「大勇猛心」聖諦第一義「靜中動」裸體に先づ「目より」く行ふに難し、常軌を逸する勿れ、等、の數章に亘りて、詳細に活動的禪の如何なる者なるかを述べ、以下九章に亘りて、古來活動的禪の如何に活動し如何なる人によりて活動せしむるを歴述せり、文章又一般宗教書類と全く其類を異にし、明快、横詞藻豐富にして、再讀するに足る。

大判洋裝一六〇頁 正價六十五錢 送費六錢

俳味禪味

俳味とは如何に禪味とは如何に、著者禪味を解するの士にして、亦初めて俳味を談ずべし、本書は俳味芭蕉に於て、閑寂趣味、の福音を宣傳し、極端なる物質主義に、茶毒せられたる、現、結淡の生活をして、趣味を生ぜしむ、近時思想界の革新命兒也、文學士沼波瓊音先生校閱・宮垣四海先生著

中判美裝二二〇頁 正價四十五錢 送費六錢

潮まぢ草

(太陽批評)一讀するに、此書程善く著者の性格を表したるは稀なるべし、吾人は本書が、單に文學的産物として、價値多きを語るると共に、青年に發する教訓書として、乾燥無味の修身書よりも、遙に效多きを揚言して、憚らざるなり、(中央公論批評)殊に、土偶木偶は著者の詩情の決して老いざるを見、其五回のさざれ文の如きは、絶世の妙文、金色夜叉の宮の書簡の如きは、到底比べものにならぬ心地す。

大判美本二九〇頁 正價八十五錢 送費八錢

加藤咄堂先生著

修養はなし草

雨窓閑話の奇警なる「文談武談」の壯烈なる「夜雨蕭々」は、一讀悚然たる幽霊奇聞を語り、附するに、著者が得意の幽霊論を以てし、茶樹神話、は清瀉飄逸なる超俗的逸話を述べて、字々清風を生ずるの思ひあり、若し其れ「修身教材」に到つては、則ち修養自警の絶好資料、俱に文章演說坐談等の新題材として、興趣津々眞に晴行雨居の好伴侶。

中判美裝二百廿頁 正價四十五錢 送費六錢

加藤咄堂先生著

朝思暮想錄

(朝思の一節)憐なる哉、今の青年、生活の爲めに業を求むることを知つて、道の爲めに求むるべきを知らず、酒々利に走りて、唯目前の事を企畫して、其の根本を逸すること、(暮想の一節)人生に於ける事業も、より少からず、されど、唯だ、沈思冥想、我が本來の心性を徹見し、其品性を培ひ、其人格を養ふ亦、實に大なる事業たるなり、

中判美本三百頁 正價七十五錢 送費八錢

加藤咄堂先生著

世態人情論

本書は的確なる統計と、奇警なる觀察を經とし、多趣有益なる史上の事實と、興味深き文藝上の作品を緯とし、痛烈なる如き快筆を以て、人心の幾微、世相の表裏等を、正面より、側面より、最も大膽に、最も精細に、現社會の忌憚なき解剖を試みたるもの、時に親を滅して斬馬劍を揮ひ、時々として處世の妙諦を語る。眞に是れ壓搾せられたる時に俗地理とも目すべき、平易に示されたる社會學と稱すべし、生活雜に惱めるの士、就職の方針に惑へるの青年等は必ず本書を一讀せよ。

大判美本六
十圓二十
錢錢

『弘道』主筆 足立栗園先生著

古英の生活觀

（北海タイムス批評）幾多の史書を採りて古武士が平生其身を率ゐし日常生活の狀態一斑を觀察して古武士が平生其身を成せし武將英雄平生の大覺悟を尋究して梗概を編次せしものなりといふ。

中判美本約百廿
圓三 十
錢錢

堀田文學士 共著
村田神學士

圓滿生活論

（東京日々新聞批評）圓滿生活は人生の理想なり、近來文明の向上と共に社會は益々複雑となり、人間の欲望は愈々停止多く圓滿主義を去ること一日と遠からんとす、本書の衝突する決して徒爾ならざるべきなり。

中判洋裝二六〇
圓七 十
錢錢

福澤桃介君著

富の成功附株式成功策

（報知新聞批評）在來の成功致富を説く者に異り著者一流の露骨なる成功秘訣を語る所興味甚大なり、殊に其經濟的用心ある猪突主義は最も味ふ可き一家言にして附録株式成功談亦諷誦す可し近來の快著也。

大判洋裝壹七〇
圓五 十
錢錢

金々先生著

致富儲けばなし

（報知新聞批評）どりや談義を初めやうと面白可笑しく説出す當流金儲傳授、是を讀んで金儲の出來ない人は福の神にもピリケンにも見放された人なる可し。

大判洋裝壹四〇
圓四 十
錢錢

松波法學博士序・原田定造先生著

手形取引の顧問

本書は近來手形の取引が益々頻繁を加ふるに隨ひ往々複雑な法律上の手續きを誤つて意外の奇禍を被る者多きを憂ひ手形法に精通せる原田先生が爲替手形、約束手形、小切手、國際手形等の性質、形式、受授の手續きを詳細に説明して且つ附するに法律用語の解釋を以てせられたるもので、松波博士が實に「問答體に依りて手形に關する法規の一般を平易に説明し讀者をして直ちに其知らんとする所を得せしむるは本書の特色なり」と賞せられたる實業家必讀の良書である。

大判美本壹九〇
圓八 十
錢錢

文學士勝屋錦村先生譯

社會主義が實行されぬなら

（大阪毎日新聞批評）本書は社會主義者の理想とする世界は一箇の夢想郷に過ぎずとなし之を實現し得たりとせんか社會に斯の如き惡結果を生ず可しとの趣旨を勞働者の家庭を背景にして面白く書かれる獨逸の代議士リヒテルの著を譯せたる痛快なる讀物なりといふべし。

大判洋裝二一〇
圓六 十
錢錢

堀内新泉先生著

時間活用法

（報知新聞批評）人生の如何に時間の價値大なるかより時間を使用するの心得をば數十百項に別して丁寧深切に記述したり時の貴ぶべきことと時を浪費すべからざることを如何に之を言ふ處なれども之を知りて行ふ者少く遂に蹉跎困頓秋風蕭蕭を吹くに及んで悔恨するもの多き時に於て斯の切實なる書の出るは喜ばしむべし。（日本新聞批評）金を浪費せぬ日本人は最も意を並に致すを要す是れ本書の必要なる所以。

大判洋裝二三〇
圓八 十
錢錢

藤田日東先生著

近獨學法

現時の學校教育は智能啓發に對する一般方略を授くるに過ぎず適者生存の活社會に立て劣敗者たり老朽者たる者死に努むと欲する者誰れか常に獨學に依りて活ける智慧の涵養に努めざるべけんや本書は即ち此獨學自修の新捷徑を詳説すべからざるべきもの學生諸君は勿論何人と雖も必ず讀せざるべからざる。

中判美本二三〇
圓四 十
錢錢

加藤咄堂先生序・本多五陵先生著

健康朝起の勧め

（中央公論批評）生理的に精神的に朝の冷氣に打たれて麗かなる太陽の光を呼吸することは大なる益のあるものである、本書は其効用を並べ更に古來之れによつて成功の基礎を築いた人並にその遺訓を取めたものなり。

中判美本壹五〇
圓三 十
錢錢

大場健兒先生著

どもり矯正の實驗

（時事新報批評）著者自身が多年吃音者として苦みし結果種種の研究を爲し自己の吃音を全癒したる經驗によりて吃音に對する感想及び最も簡單なる實驗上の吃音矯正法を叙したるもの吃音者の參考とすべきなり。

中判美本全一
圓四 十
錢錢

安田操一先生著

禁煙の實驗

（東京日々新聞批評）著者が實踐を以て其の効果を試みし告白なり、經濟上及び衛生上より討究して其の効驗と害とを明らかに證明したるものなり。（萬朝報批評）酒は止められるが煙草は止められぬとよく人の言ふとなりこの書は具體的にその方法を説き禁煙の爲し得らるるに且つ如何なる効果あるかを説けり。

大判洋裝壹六〇
圓四 十
錢錢

(密嚴訂校)

車上叢書

和漢先哲遺著 諸大家校訂

袖珍トツプギルト總クロース 各冊三百頁内外頗美裝 正價一冊 金六十錢

送費一冊 金六錢

古人は作文屬想の三佳境と... 野村胡堂先生遺著 足立栗園先生校註

- 第一卷 野村胡堂先生遺著 足立栗園先生校註
第二卷 野村胡堂先生遺著 足立栗園先生校註
第三卷 野村胡堂先生遺著 足立栗園先生校註
第四卷 野村胡堂先生遺著 足立栗園先生校註
第五卷 野村胡堂先生遺著 足立栗園先生校註
第六卷 野村胡堂先生遺著 足立栗園先生校註

野村胡堂先生遺著 足立栗園先生校註... 井上文學博士が其著書中に「格言の服膺すべき...

偉人修養史

破魔禪居士著

大判洋裝二一〇頁 正價六拾錢

偉人修養史 夫れ水の流るるを止むるは、其水面に浮べる葉の一片なり...

修養偉人之風化

中判美本二七〇頁 正價五拾錢

修養偉人之風化 夫れ水の流るるを止むるは、其水面に浮べる葉の一片なり...

立志全力の人

大判洋裝四七〇頁 合本壹圓四拾錢

立志全力の人 獅子の兎を捕つや其全力を用ふと、自己の全力を擧げて事...

報知新聞記者熊田草城先生著

(賜天覽)少年武士道

全二冊各二百廿頁 第一冊各四拾錢

(賜天覽)少年武士道 報知新聞批評 本書は少年の志氣を鼓舞し忠勇義烈の精神...

楓村居士著

英雄俠雄錄

大判洋裝二二〇頁 正價六拾錢

英雄俠雄錄 (馬關毎日新聞批評) 之れ著者が曾て支那に遊び長江を遊り...

(賜天覽)血烟

大判洋裝三九〇頁 正價八拾錢

(賜天覽)血烟 (やまと新聞批評) 著者は素と一年志願兵として軍隊生活に...

福本日南先生著

英雄論

大判美本二五〇頁
送費八拾圓

(東京日々新聞批評)本書は古今東西の英雄を拉し來りて綴りて、其の批評を加へ、其の風采を本領特能、個性、紙表に活躍せしめ、千載の後、之に親接するの感あり、著者の文最も此種の記述に適し、單に文章を學ぶ者の爲めにも、一本を具へ、此の心からさるもの、殊に情氣一世を蔽ひ、イカガ風の人心を柔化せんとする時、此快書の出づるは、我讀書界の爲めにも、社會の爲めにも、大に實せざるを得ず。

白柳秀湖先生著

親子分

中判美本四百餘頁
送費八拾圓

(東京日々新聞批評)世間の事業は、すべて親子分の關係に維持せらるゝものなり、古來より日本の大親分頼朝、尊氏、秀吉、家康の四人につき、其天下を取り、根本の理由を、明し、其經濟上に於ける親子分の關係を述べたり、其着眼の普通史家に一頭地を抜けるものあり、キビシキとしたる書きぶり、讀者をして一氣に讀了せしむるに足る面白き著述なり、山路愛山先生著

武家時代史論

中判美本三一〇頁
送費八拾圓

我國史を讀みて最も波瀾起伏に富めるは、武家時代也、最も多き教訓を藏せるも亦武家時代にあらずや、愛山先生今其燃るの史眼を放ちて、筆を承久の役に起し、中古の戰術を論じ、鎌倉より室町へ過渡時代、戰國時代の形勢及戰術民俗、戰國武士を論じ、外國交際の影響より、諸侯の富國策、京都及江戸の發達、徳川時代の民政を説きて、更に天草騒動の顛末を詳叙し、我帝國史の華あり、實ある、中古より近世の史實に就きて、確據の論評を加へらる、趣味津津たる一大痛快史論也。

小杉天外先生著・阪井紅兒先生書

伊豆乃頼朝

大判美本三百餘頁
送費八拾圓

頼朝が生涯中最も趣味深く、涙に富めるは、伊豆に離れ、伏せし間の前半生に在り、姪が小島の雨の辰、伊豆山権現の月の夕、兒が淵に祐親の無情を憫りつゝ、逝ける子の魂を弔へるも、幾度か運命の思はれ、人を買はれて思はれ、戀に助を得たり、誰れか運命の數奇なるに驚き、目を割らざらむ、天外先生其胸中の形筆を揮つて、此間の幾微を穿ち、兼れて、鎌倉武士の眞骨頭を活躍せしむ、硬軟自在の筆致、近來稀れに見る頼朝傳也。

福本日南先生著

黒田如水

大判美本約三百頁
送費一圓五十錢

(國民新聞批評)戰國英雄中の異彩小東照公如水一生の行動を其心事までに立ち入り、縦横自在に解剖し、來る如水は著者が同郷の偉人之を、拙くに史的材料的豊富なる、例の奔躍飛ぶが如き快筆を以て、す油の乗りし好史傳たるや、論無し。

福本日南先生著

直江山城守

大判美本二九〇頁
送費八圓二十錢

(萬朝報批評)石田三成と相約して天下を一匡し、家康を介して太閤の遺業を保せんとし、人事を盡し、敗後、祿を他に頼つて、晩年の風月に嘯きたる直江兼續の一生は、飽くまで、男らしく清く高し、日南これを日本男兒の典型として、天下に紹介す、行文激烈、字々火を噴く、讀者をして兼續たらしめ、ずんば止まざるの勢あり、痛快の著なる哉。

文學博士幸田露伴先生著・阪井紅兒君書

朝

大判美本二八〇頁
送費八圓拾錢

大頭公の生涯は、眞に努力奮闘の連続なり、數奇なる運命、手は、幼にして斬らるべかりし英雄を、伊豆に送りて、更に失戀喪兒の苦が、きつて、雨を降し、將に枯れなむとせし、野心の萌芽を培ひ、疾風迅雷、倏忽にして、覇業創建の大活動、演ぜしむ、を讀む者誰か、慨然として、志を立て、さらむ、事件先生此古英雄が、埋没せる個人的事蹟に、興味を有せらる、久しく、博考去證、遂に斯一篇を成す、文詞渾麗、理趣精透、近時文壇、史壇の一偉觀たり。

綠園先生著「新太閤記」

豊臣秀吉

大判美本全六册

▲日吉丸の巻 壹 筑前守の巻 壹圓廿錢
▲藤吉郎の巻 後編壹圓參拾錢 送費各册八錢 近刊
(報知新聞批評)古今豊太閤に關するの書汗牛充棟も、當ならざるもの、其の如き、興味、味、能かなる筆致を以て、其一代を叙し、失はんとす、江湖の歡迎期を待つ可し。
(東京朝日新聞批評)藤吉郎の巻、出づ、大阪朝日新聞連載中の人の爲し、難き辛抱をなして、天下を取りたるに、非ず、忍耐刻苦に、出世せり、いふ道行をよく、少年者の、理會せしむるに、上り、記は、愈々佳境に入り、見よ、草履つかみの、猿は、頭角を現は、し、讀者を、抱擁して、巻を、捲くに、堪へざらむ、蓋し、近來、稀有の、好讀物。

文學士幸田成友先生著

大鹽平八郎

大判美本四四〇頁
送費一圓五十錢

(萬朝報批評)奇傑大鹽中齋を傳する未だ、斯くの如く、詳悉なるものある無し、著者久しく、大阪に在り、あらゆる舊記を、搜り、又親しく、故老を、問ひ、史料傳説、兩つながら、十分に、蒐集し、力ある口語文をも、て、この傳を成せるなり、第一章には、與力としての功績を、第二章には、學者としての貢獻を、第三章には、亂魁としての行動を、記す、其の亂魁章下、決心、準備の項、の如き、是に、悲壯の文字なり、系圖地圖を、多く、挿みたるが、如き、親切可憐、極めたり、中齋の傳、初めて、完了。

故昆尼薩臺巖師校閱・青山霞村先生著

深草の元政

大判美本二二〇頁
送費八圓十錢

(萬朝報批評)元政を傳せし書、已に三四あり、と雖、眞に元政を知る者、少しく、多くは、唯面白き、人たるを知るのみ、霞村は、田園に成長して、元政の爲人、最もよく、理解する、人、霞村は、前より、想を、構へ、て、この詳傳を、爲す、上人の、眉目、初めて、明かになり、文亦、清淡、頹る、愛す、べし、新涼の、夜々、徐に、此奇傳を、味ふ、塞に、快適の、事なり。

文學士白河鯉洋先生著

孔子

大判美本四一〇頁
送費一圓二十錢

世界三聖の中、尤も吾人に、深大の感化を、及ぼせるものは、夫れ、我が、孔子、夫子に、非ずや。著者、遂に、清國に、在り、許多の、前人、未だ、高き、夫子が、遺傳なる、大人格は、著者、が、流麗の、史筆に、依り、如として、紙上に、生動し、一讀、儒夫をして、奮起せしむ。眞に、是れ、孔子、研究の、一大、鐵案にして、又、論語、六經、其他、あらゆる、聖訓の、最詳なる、解説也。

山路愛山先生著

勝海舟

大判洋裝二六〇頁
正價九十九
送費八

(大阪毎日新聞批評) 幕末の偉人海舟勝麟太郎先生の生涯を記せる書なり海舟先生幕末に生れ頑冥なる幕臣の間に國難に處し維新回天の大業を翼賛せし事蹟を愛山一流の筆にて縦横に叙説せり狂と呼ばれ轟と呼ばれし海舟の一生は一面に於て幕末の活歴史なり本傳能く其間の消息を傳ふ。

山路愛山先生著

佐久間象山

大判洋裝二八〇頁
正價九十五
送費八

(中央新聞批評) 象山は維新の志士にして三尺の童幼も知るの偉傑愛山氏は史家にして文章を以て著る此著者にして此偉傑を傳す蓋し近來の快著と謂ふべし叙するところ「少年時代」「第一回遊學時代」「在郷中時勢の變化」「再度の遊學」「歸郷」「第三回の出府」在國營居中の象山「非命」斃るの一章に分ち的確なる考證と明快なる史眼とを以て極めて詳細に詳傳せり殊に口語文を以て綴りたるところ低級の讀者にも適すべし。

和前天華先生著

坂本龍馬

大判洋裝四百頁
正價一四十二
送費十

(東京日々新聞批評) 坂本龍馬は幕末の日本が産出したる第一流の偉人にして維新大業の中軸たる薩長連合は一に彼と大西郷との默契によりて成ると稱せらる不幸中途にして暗殺の厄に遭ひ其亦史料散佚して多く傳はらず本書は土佐の士に聞き寺田屋に聞き維新史料を搜り殊に手から龍馬の殺害したる今村信郎氏に聞き之を小説體の讀物に綴りしるののにて事實以來江朝の大變遷を受け第五版を出せり。

長谷場文部大臣閣下序文及長歌
福本日南先生序・伊藤痴遊先生著

陽天覽 西郷南洲

大判美裝全三冊
正編續編各九十五
送費各冊八

(萬朝報批評) 痴遊が其辨舌の如く筆を驅りて南洲を見るが如く描き出だしたるもの、講談速記に非ず、島津家騒動より征長事件まで廿一章に分てり、これを讀めば肩張らずしてしかも感化を受くること多し、福本日南の序と英國にて發見されし珍品たる南洲の寫眞と巻頭を飾り(雄辯批評)大西郷傳を中心として日本歴史中最興味多き幕末史の側面を寫したるもの、傳の詳密を極めたる事、對話の巧妙なる事、宛然其人を其場に目睹するが如きは著者が多年演壇より得たる、縦横活殺の手腕によりて描かれたり、而して叙事文の巧妙なる事は更らに驚くべし、鹿兒島櫻島、京都岩倉、江戸城等の記事殊に可なり朗々吟誦すべし、南洲の外編中の人物何れも活躍するが中にも勝安房、山内容堂、岩倉具視、等最もよく描かれたり、續編に於ける江戸城明渡の一節は、真に敵も味方も一齊に手を拍つて讚嘆すべき所也、近時出版の英雄傳中最特色あるもの也、夏日綠蔭の下之れを掃かば暑を忘るべき也、好著也、快著也。

◎五册合本特製美本 正價六圓五十錢送費廿四錢

林通情大臣閣下題字・加藤唯堂先生序
伊藤痴遊先生著

陸奥宗光

大判洋裝各一冊
正價各九十五
送費各八

(萬朝報批評) 伊達小二郎の昔より「かみそり大臣」の當時に至る一代の奇行偉勳を叙す、艶姿、嬌舌、其間を點綴し、怪男子の面目は怪男子の筆によつて頗る活躍せり。

藤田長江先生編

福澤翁言行錄

大判洋裝全一冊
正價四十五
送費四

本書は我が新文明の一大恩人として最も光彩ある生涯を有せし平民的大偉人福澤翁の敬慕すべき言行を録してその獨立自尊主義、實學主義、常識哲學を鼓吹せしもの人格修養の活模範たり。

伊藤痴遊先生著

第一快傑傳

箱入美裝各一冊
正價各一
送費各八

(日本及日本人批評) 頭山滿、桂小五郎、星亨、中江兆昌、中井櫻洲其他の豪傑奇人の逸話奇聞を小説體に書き綴りたるもの、津々たる興味、眼前其の人を躍如たらしむ。消閑の好書たるのみならず、青年子弟の修養にも資するに足らる。

伊藤痴遊先生著

後の西郷南洲

大判洋裝三九〇頁
正價一四廿
送費八

(つまと新聞批評) 著者更に滿腔の熱心を凝して以て此の編を成す。談は益々佳境に入りて、筆をひきき舞ふの趣あり、谷將軍の持久の力に富める、桐野孫原の猛烈當る可からざる、村田別府の智略縦横なる、其間にありて、雄然として雄大な南洲翁の面目心事、殊に歴々として紙上に躍動し、波瀾萬丈、悲壯淋漓たるものあり、且つ最も複雑紛糾なる記録と傳説とを考證取捨して、力めて公平なる見地に立て、官軍兩軍の事情を明かにしたる、著者の用意と其勢も亦實に多とせざる可からず。

伊藤痴遊先生著

西郷南洲外篇

中判美本三七〇頁
正價六十一
送費八

南洲翁と相擁し、一首の和歌に勤王の赤誠を止めて、薩摩の瀬戸に身を沈めたる傑僧月照を中心とし、南洲翁の苦衷、維新活動の一大裏面等を著者獨特の快筆を以て直寫せるもの、一讀神然ひ、鬼哭するの思ひあり、南洲翁の大人格に服せるの士は、又其別頭の同志たる月照を知るとを忘る勿れ。

白田一楠先生著

西郷南洲言行錄

大判洋裝二一〇頁
正價六十一
送費八

(毎日電報批評) 西郷南洲は後世に懸りて一大奇蹟なり彼が偉大なる生涯の出発點は本邦歴史中の大革命なる維新の風雲にして其興味多き官行の終焉は薩摩軍人に依りて脚色されたる大感動即ち城山の自刃にありき此書は此偉人の生涯を縦横に寫して刻々人とするもの、如く材料を沈み、蒐集して傳、官、行の分類に收め英雄の傳記として最も佳なり宜きを傳たりと云ふべくたゞ青年子弟の好讀物たるのみならず明治維新史の一頁として世人の一讀すべき良書なり。

文學士物集高景先生・村田天籟先生共著
國民教育 日本歴史歌譚
中判美裝全一冊
正價八十五錢
送費八錢

「人毎に一つの癖はあるものよ、吾れには許せ、敷島の道」
上は神武天皇、日本武尊等より、下は吉田松陰、西郷南洲等
の幕末維新の諸偉人及び、雪の長月の夕、君を愛ひ、國事
を慨して赤誠を吐露し、懷興を寄せたる時の和歌を中心と
して列傳體に我日本歴史を叙せるものにして、音に我國民
性を説ふべく、風竟の參考たるのみならず、眞に演説、講演
修身歴史教授上の絶好資料なり。
三宅雪嶺先生序・福本日南先生序・鈴木天眼先生序
黒岩周六先生序・佐々木照山先生序・鶴崎鷗城先生序
大判美本四四〇頁
正價一圓五十錢
送費十二錢

評人物 朝野の五大閥
本書篇を分つ五。曰く「官閥篇」曰く「黨閥篇」曰く「學閥篇」
曰く「財閥篇」曰く「閥閥篇」俱に是れ黨城學人得点の人物月
且。權後に現社會に於ける中心勢力の本源を、別抉露して月
快劍陣を研るの概あり。 卷末人名索引、亦眞に好箇現代
人名辭典の用を爲す。
早稲田大學講師 吉田公重先生編
中判美本三四十頁
正價五圓十錢
送費六錢

修養 米國十大偉人
米國の父たるジョージ・ワシントンに筆を起し、ジョン・アダムス、
フランクリン、ヘンリー、ハムリン、ブルント、ランド、アダムス、
マックケンリ、ワシントン、ワシントン、ワシントン、ワシントン、
者富豪に亘り、世界の偉人十家を選り、學者政治家、軍人、工業
を指摘して大膽なる人物解剖を試みたるもの、蓋し著者所
に在り米國の實際研究に出づ。米國は世界の最新進國とし
て邦人の彼の國に學ぶべきもの、眞に人格修養の活模範と稱すべし。
大判美本二五〇頁
正價七圓十錢
送費八錢

尾崎、清水、高島三大家序・高橋漢水先生著
列傳體 日本新英傑傳
大判箱入美製本
正價二圓三十錢
送費十錢

全篇を維新史・憲政史・外交史・教育史・軍事史・實業
史・附録の七部に分ち、徳川慶喜、勝海舟、三條實美、岩倉具
視、木下幸允、大久保利通、西郷隆盛、板垣退助、大隈重信、伊
藤博文、陸奥宗光、福澤諭吉、加藤弘之、近藤勇、中村正直、
新島襄、森有禮、井上毅、大村益次郎、山縣有朋、川上操、乃
木希典、山本權兵衛、東郷平八郎、三井家、岩崎彌太郎、澁澤
榮一等各方面の代表的人物數十家を擧げ列傳體に、其人物事
業を詳述し、所論警拔、叙事明快、當に新體の大明治史にして
又活潑なる立志篇を兼ねたる物、實に空前の最近英傑傳也。
井上侯爵閣下題字・伊藤痴遊先生著
大判洋裝四〇〇頁
正價一圓四十錢
送費十二錢

血氣時代の井上侯
藤公遊いて後幾年、轉た元老諸公の意氣鬱らざるの感ある
時、獨り我井上三猿侯あり。些かに人意を強からしむ。痴
遊先生近時歴々老侯に親炙して、口づから血氣時代の經歴
を語り、今や其得意の筆舌に陶鑄して乃ち本篇を得たり。
袖付橋の秋の夕や如何に、別府温泉の雨の長や何れぞ、眞に
血湧き、骨鳴る一大活立志譚。
伊藤痴遊先生序・小野蕪史先生著
大判美本二五〇頁
正價七圓十錢
送費八錢

維新英雄と女
「大事件の裏面には必ず女あり」と呼ばるゝ如く、維新革命
の驚天動地の大活劇に於ても亦、其隆には女子の力の加へ
れるを看過すべからず。本書維新革命の諸英傑の情事、配するに、眞
察して、隠れたる明治及維新史の秘密を發し、配するに、眞
眞に感嘆する英傑裏面史なり。
大判美本二五〇頁
正價七圓十錢
送費八錢

講談諸大家講演

袖珍講談叢書

袖珍形總クロース類美製本
五號活字總ふりがな付
一冊貳百五十頁内外
正價一冊參拾錢
(送費)一冊四錢四冊拾八錢

(切讀册各)
在來坊間に行はるゝ講
談本なるものを見るに
其内容極め共に見るに
陋を極め、實に其家の
家庭に於て子女團聚の
裡に繰り出すに堪へざ
るのみならず、又紳士
淑女の手にするは、獨
り吾人が遺憾とするは
かりではあるまいと思
ふ。袖珍講談叢書は如
上の缺陷を補はむがた
めに、其内容を取題と
て、一面に於いては、讀
むの史的趣味に適合せし
むると共に、他面に於
いては、國民の徳性涵養
に裨益あるものを選択
し、每冊讀切本として
刊行せんとするものであ
る。希くは愛讀の樂を
賜はらんことを。

- 第一卷 小金井 ○堀部安兵衛
- 第二卷 貞山師 ○實曾我物語
- 第三卷 錦城齋 ○荒木又右衛門
- 第四卷 西尾 ○大川友右衛門
- 第五卷 故松林 ○河内山宗俊
- 第六卷 寶井 ○宮本武藏

赤鞘の安兵衛が昔高田の場所十八番斬の奮戦
突撃より雪の曙吉良邸の討入に君に報ゆる赤
義士の譽れを擧ぐる迄血沸き肉動く絶好讀物。
世に小金ヶ原の仇討と聞えに吉岡青山の二兄
弟が十一代將軍家齊の狩屋を襲がしたる壯烈美
似たりや似たり昔曾我兄弟が難苦しい異なり
伊賀の上野に三十六番斬の早技を示して當時武
道の鬼神と稱へられし荒木又右衛門が門弟水海
六郎次への助太刀は義を見て措かざる大丈夫の
俠骨が眞に花も實もある一大仇討奇談。
君の爲めには死を見ること鴻毛より軽き血達磨
の大悲壯劇。父の爲めには義を見ること泰山よ
り重き印南馬が孝烈の一大美譚。忠孝双璧の
好讀物は即ち是れ。
名優市川團十郎をして「嗚呼！釋の河内山」と嘆
ぜしめたる名人伯圓師が得意中の得意の讀物天
保六花選は即ち是！お數寄屋坊主の河内山と夫
れ増兒が、任俠が、無頼漢か、本書之を寫して戀
味湧くが如し。
弱冠にして二刀の術を發明し、臥薪嘗膽父の仇
を報じて、後遂に仙に昇せる宮本武藏は夫れ武
士道の權化か！將た又、飯道の鬼神か、寶井馬
野郎得意の武勇傳。

黒法師先生著
世界の美人探検
箱入美本四八〇頁
送費一圓四十銭

野口米次郎先生著
那日本少女の米國日記
大判美本二八〇頁
送費八十五銭

秋元蘆風先生著
シルレル詩集
袖珍美本一九〇頁
送費四十一銭

町田柳塘傳史著
訂漢詩講話
袖珍美本二五〇頁
送費五十二銭

町田柳塘傳史著
訂漢詩講話
袖珍美本二五〇頁
送費五十二銭

作文法講話
中判美本百十頁
送費四十三銭

新寫生文
中判美本二三〇頁
送費五十八銭

文學博士幸田露伴先生著
説はるさめ集
大判美本百七十頁
送費八十五銭

沼田頴川先生註
註二日物がたり
中判美本百十頁
送費四十四銭

山口小太郎先生著
シルレルの歌評釋
大判美裝全一冊
送費四十一銭

文學士武島羽衣先生序・志賀華仙先生著
和歌作法
中判美本一三〇頁
送費三十一銭

佐藤仁之助先生著
新百人一首通解
寸珍美本百二十頁
送費二十二銭

英文學講話
中判美本一五〇頁
送費六十五銭

高濱虛子先生編
高濱虛子先生編
中判美本一五〇頁
送費六十五銭

東京開成中學校 國語漢文科講師 佐藤仁之助先生著

速成漢學捷徑

（やまと新聞批評）本書編を分つ事十三、漢文と漢學とに關する一切の要綱を説いて親切な極む殊に、隨所に故事成語の解を收め更に卷末に索引を附せるが如き以て著者の用意の如何に深きかを知るに足るべく真に捷徑の名に負かず。

東京開成中學校 國語漢文科講師 佐藤仁之助先生著

國語漢文要語詳解

（東京日々新聞批評）國語漢文中に用ひらるる熟語故事數百句を抽出し之に詳細なる解釋を施し且語原を註記せるものにして國語漢文を學ばんとする者は云ふ迄も無く其他單に普通文を讀する者にとりては神益する所尠少にあらざるべし（日本新聞批評）國語漢文の要語を字音に從つてイロハ順に非列し其意義典故を示せるものなり受驗用として適當ならむ。

東京開成中學校 國語漢文科講師 佐藤仁之助先生著

假字用法及誤動詞語尾表

吾人が文章を作るに際し、一見非常に容易なるが如くにして、而かも實は却つて多大の困難を感じるものは、夫れ所謂「かな遣ひ」に非ずや。本書は國語かな遣ひ、字音假字遣ひの全部に亘り、一々記憶し易き便法を示し、且つ誤り易き動詞語尾の變化及區別を詳述して、文章家并に國語研究者の絶大利益を策したる佐藤仁之助先生の最新一覽表也。

佐藤仁之助先生立案

假字用法及誤動詞語尾表

ホケットト入形折本 正價六 送費二 錢錢

幸田露伴先生序 文學士 沼波瓊音先生編

俳句大成

（中央公論批評）俳句なるもの、起因から觀き初めてそれの餘情の尊ばれる事や季節の必要な事や此の理由を明らかにした上その季節に關する法則、切字の心得題材には平等觀を保持すべき事や字句の簡潔を要する事、時に繁冗なも厭はぬの如何等一々例句を擧げて平易に周到に手引したるものなり文學士 沼波瓊音先生校訂 三宅嘯山師遺著

文學士 佐々醒雪先生序・文學士 沼波瓊音先生編

俳句講話

（中央公論批評）評初學者の手引草にと一わたり俳句の作方を解き古今人の四季の名句を解釋し終に參考とすべき俳句集に俳論書を擧げて其の概をも示したるもの説明の體煩閑宜きを得能く初心者をして俳の精神を默了せしめ得る者也

文學士 久保天隨先生序・文學士 沼波瓊音先生著

俳句研究

（萬朝報批評）むづかしき理窟を列べしして著者が己れの俳歴を其儘に、初學者の參考としたるは面白し、俳句の解釋も字句に拘泥せずして其趣を讀んで見るやうに説きたるは嬉し（大阪毎日新聞批評）冒頭先づ瓊音子自家の俳句研究の過程を語り次に古今名家の俳句を評釋し兼て俳句と他文藝との關係を論じり俳句入門の書として初學者に實益する所多し

東京開成中學校 國語漢文科講師 佐藤仁之助先生著

漢字異同辨及用法

本書は同訓或は同音にして、而かも其の意義を異にせる漢字の異同を辨じ、且つ一々用例を示して、懇切に使用法を説き以て机上の便覽に供したるものなれば、世の操縦の業に従へる諸君は勿論、日常作文の參考書として萬人必携の寶典也。

佐藤仁之助先生校補・東亞堂編輯局編

國語異同辨附假字表

本書は、國語の中に於ける同字同音の語句、或は相似の文字にして、意義を異にするもの數千言を對照し、一々懇切に其異同を辨じたるものにして、斯學に於て堪能の聞え高き佐藤仁之助先生の嚴密なる校補を経、且つ同先生の最新に成れる便利なる假字用法及動詞語尾區別表を附したれば國語研究者の參考として有益無比の良書也。

文學士 沼波瓊音先生著

俳句階梯

（中央公論批評）俳句なるもの、起因から觀き初めてそれの餘情の尊ばれる事や季節の必要な事や此の理由を明らかにした上その季節に關する法則、切字の心得題材には平等觀を保持すべき事や字句の簡潔を要する事、時に繁冗なも厭はぬの如何等一々例句を擧げて平易に周到に手引したるものなり文學士 沼波瓊音先生校訂 三宅嘯山師遺著

文學士 沼波瓊音先生著

俳古選新選

（新小説批評）古選は曾て俳諧珍本集中に編されて大野酒竹氏の校訂あり當時珍本中の珍本として持て難されたるが後結果こゝに此の書に接するを得たるは俳諧研究者のみならず一般讀者の渴を醫する事甚大なるべくと思はる新選は兼村太蔭太等の句散見するに於て興味なくしに深し免に少かるべし、吾人は本書を推薦するに吝ならざるものなり、裝釘の俳珠を帯へる亦嬉し。

鳴雪、竹冷、瓊音 三大大家 服部耕石君著

人生俳句集

人を離れて、事なし。課題と云はず、贈答と云はず。俳人雅客が最も多く句作を徹せらるゝの類題は、夫れ人事句に非ずして何ぞや。本書は服部耕石先生が、博く古今の俳諧に關する珍本秘籍を渉獵して、祝賀、弔祭、贈答、寒暑、行樂、情景、感想、神祕、釋教、戀、無常等の諸門に亘り、凡そ人事に關する名吟佳句は洩らさず蒐集分類して、春夏、秋冬、雜の順序に排列せし俳人必携の一大寶也。

法學博士神時勝光、實田江東、兩君共譯

白露の再戦

大判洋装三九〇頁
送費一圓二十錢

本書は將來日露兩國の再び東亞の天地に砲火を交へべき運命を有する所以を、歴史、地理、外交、經濟、人種問題等の諸方面より、精確に分析し、警拔なる論評を試み、以て世界強國の權力論に及ぶ。著者にして、原書發售以來、廣く識者同様に其稀世の名著たることを知るに足らむ。苟くも志ある同胞は他山の石として速に本書を一讀せざるべからず。

山口陸軍少將題墨 陸軍少將大尉 本間徳次郎君著

血戰

大判洋装二三〇頁
送費八十五錢

本書は、同胞の血と、肉と、砲火とを以て彩られし、日露戦争の激戦を以て、精神に活寫せられたる、本間陸軍少將の戦場日記にして、一讀魂飛び、神傑く、日本男子必讀の大快書也。

日野陸軍少佐校閱・平山周先生著

飛行機圖説

大判美装全一冊
送費一圓五十錢

(東京日日新聞批評) 本書は飛行機の沿革、構造、材料、性能の構成、其の効率推進機に関する諸般の事項を説明することを詳細に飛行機に於て最も重要な發動機の構造に力点を注ぎ、その如く多少の要を得たり。巻末にはライト、モーター、エンジン、プロペラ、アンチストローク、グライダー、その他各飛行機の明細なる圖解を掲げあり。本邦飛行界の泰斗日野少佐の序々に、之れを歐洲の新著に比するも敢て遜色なきを信す云々。とある。又宜なるべし。

ルドルフ・オイゲン原著・文學士安倍能成君譯

大思想家の人生觀

大判美本七〇頁
送費三圓六十錢

カント出で、哲學の明星と仰がれ、後、ヘッゲル、フエーバハ等皆一家の哲學家を説くと雖も、徹底したる者とは言ひ難かりしに、オイゲン氏出で、此等の説を大成して吾人の渴を醫す。獨のオイゲン氏のヘルゲンソンは近時思想界の二大權威也。今安倍文學士謹重の筆を以て其名著大思想家の人生觀を譯出せらる。志ある者の必讀すべき一大名著也。

文學博士三宅雄次郎先生序・山岡光太郎先生著

世界のアラビヤ縦斷記

大判美本全一冊
送費九圓八十錢

近時中央亞細亞に於ける研究、全世界の一大懸案となれるの今日、南方亞細亞の神祕境たるアラビヤの真相を知るは決して徒勞なりとせざる所。本書の著者山岡氏自ら回教徒にやつして、アラビヤの境を冒し、自ら邦人未踏異教徒不可條のアラビヤを踏破して、壯絶快絶なる一大探検を成就す。條條樹下本書を讀み、萬斛の涼味紙上に生動するを覺え、眞に巻を捲く能はざるものあらん。

大住舜・神村與三兩先生共譯

大奈翁日記

中判美本全一冊
送費一圓五十錢

●怪傑ナポレオンが偽らざる自己告白！
身を砲兵の一士官に起し、一躍終身執政官、再躍帝位を得て、旭日昇天の概ありし蓋世の英雄ナポレオン、第一世が莫斯科の痛手を蒙り、北北を招き、ウオーターローの決戦に最後暴行監視の下、セントヘンナの孤島に、千秋の恨みを飲み、叫聲する迄の日記現はる。是れ繪が波瀾萬狀の生涯と紛叫聲する迄の西歐天地の縮圖也。敢えて江湖に動む。

文學博士富士川游先生序・澤田順次郎先生著

男女の關係

大判美装全一冊
送費四圓三十五錢

本書は千古の一大疑問たる、男女兩性の差異を研究し、冷僻なる科學の立脚地より、兩性が赤裸の真相を暴露して、戀愛研究の必要を唱道し、且つ男女各任務の分業、生殖の意義、色慾の毒害等を説き、男女兩性を以て各其本分を自覺せしめ、以て頹敗せる現時の社會風教に一大痛棒を加ふ。男女孰れたるを問はず、必ず一讀の要ある快書也。

丘。福來二博士序・薄井秀一先生著

神通力の研究

大判美装一八〇頁
送費八圓十錢

世に不可思議の力あり能く聲無きを聞き、見ざるを察し、禍を未然に防ぎて、福運を將來に開拓す。稱して神通力と呼ぶ。而かも此の不可思議の力たるは、實に我等人類に通用せる一大伏能なりと云ふに至つては、誰れか此支那の樞機を識得して以て鬼を役し、神を驅るの大偉力を養はむと志し、思はざらんや。本書遺般心靈界の非常現象を闡明して、餘蘊なし。何人に對するも極めて興味深き緊要文字！

大日本催眠學會長 小野福平先生著

催眠術治療精義

大判美装二四〇頁
送費九圓十錢

本書は、大日本催眠學會會長として、本邦催眠術研究者の先覺たる小野福平先生が富饒なる學識と、多年の實踐とを基礎とし、博く東西の學說を參照して、筆を催眠術の原理と起し、心理學、生理學、醫學等の根柢より、催眠術を以て治療し得べき諸種の疾病の病理、症候、經過、療法等を説明せられたる催眠學界空前の大著にして、催眠術研究者は勿論、醫家經世家等の有るも看過すべからざる良書也。

シエンキイウキツ原著・本間久先生譯

死に、行く身

大判美本全一冊
送費七圓八十錢

原著者シエンキイウキツ及ゴルキイは共に、現代全歐文壇を風靡せる二大明星也。而して本書は兩氏が許多ある近作中、最も卓越せるもの各一編を擇ぶ。譯文又、直譯、逐字譯等の通弊に捕促せられず、頗る明快暢達、毫も晦澁の所なし。

文學士 阿久津清先生著

森林學講義

大判洋装全一冊
送費七圓五十錢

近時木材用途の激増と其面積の農業に蠶食せられたるは、森林を以て荒廢の極に達せしめ、間接には氣候の調和を破り、洪水旱魃の害を發し、直接には用材、薪炭の不足を來たし、社會生活上の困難を醸成するに至れり。於是森林學の必要益重きを加ふ。著者大に鑑むるに、於て是の蘊蓄を傾盡して本書を著す。編を分つ七、章を劃する二十五。叙述明快にして懇切、萬人必讀の好文也。

東洋大學教授 境野黃洋先生著

法華物語

大判美本全一冊
送費八圓五十錢

傳來以降二千載、佛教が我が國文化に及ぼしたる影響の甚大なるを論を俟たず。深遠なる哲學と、神祕なる宗教の寓意とを以て作せられたる八卷二十八品の法華經は、其の難得たりといふも、溢美の言にはあらず。本書は、佛經の難解なる經典を叙述するに、境野先生の雄渾壯麗の筆を以て、佛語辭書を用をなし、便益無比。

338
175

終